
分科会3

「復興に向けた被災地での取組」

話題提供資料

とちぎボランティアネットワーク

災害ボランティア オールとちぎの取組み

とちぎボランティアネットワーク理事

災害ボランティアオールとちぎ隊長

柴田貴史

1. 災害ボランティア活動に取り組むことになった経緯

- 初めてのボランティアは阪神・淡路大震災だった。高校2年の春、勉強もしないで遊んでばかりだった自分に「何か人のために役立って来い」という父親の一声で強制的に参加させられた。
- 何をしたらいいかわからない私にスタッフは、「一人ひとりの表情を見ること」と教えてくれた。それからは、いろんな災害の被災地に行くことで覚える側から教える側にだんだんとなっていった。そして、災害ボランティアは「心と心のつながりを創っている、活動はきっかけのひとつに過ぎない」という思いが自分の中に生まれてきた。
- 新潟県中越地震／中越沖地震では、地震が発生したその日のうちに現地にいきました。栃木から継続的な派遣をするための情報収集、現地のベース確保、ボランティアバスの調整など主にコーディネート業務を行った。
それからは、毎週のように現地に通い、「私の顔を覚えてもらい」信頼して活動が続くようにコーディネートしました。
災害ボランティアでは「よそ者」が被災地で活動するには様々な課題があり、なかなか順調に事が運ばないことばかりです。「知らない人にボランティアを頼み、知らない人にボランティアする」ことはお互いに不安なものです。手伝ってくれてありがとう、信頼してくれてありがとうというような双方が尊重しあう関係があって活動が継続できる。
と私は信じていますので何度となく現地に通いました。
- 岩手・宮城内陸地震では、地震発生した時には社会福祉協議会で防災講座をしている最中でした。講座が終わると早々に現地に向かいました。受講者の中には、「講座専門で現地活動はしないと」思っている方も多く、これから現地に向かうとアナウンスが流れると驚きがあったことを覚えています。
- 震災発生から約3か月はほぼ毎週、その後の1年間は月に1回ずつと徐々に活動の頻度は落ちてきますが、5年を経過した中越地震の被災地には未だに通っています。
- 地域の人達と仲良くなり、信用してもらうこと。支援者や支援プログラムが一方向的な押し付けにならないようにしつつ、地域の人と共に考え、悩んで、(失敗も含めて)じっくりと地域のペースで復興に向かうよう環境を整える。そんな具体的な作業とスタンス(身構え)が重要だと思いながらボランティアしています。

2. 活動する中で見えてきた地域の課題

3. 今後、対応が必要だと思う地域の課題と取組みの内容

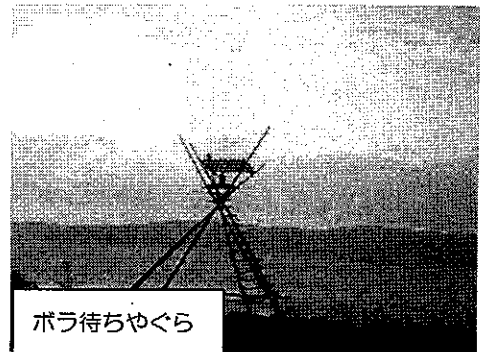
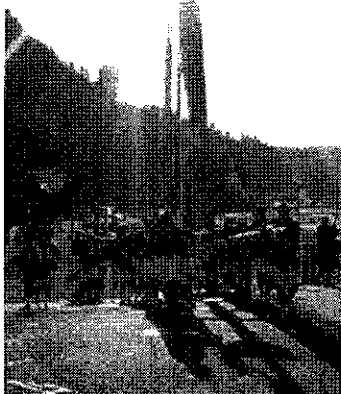
オールとちぎ通信

平成 21 年 10 月 6 日 災害ボランティア オールとちぎ発行 第 168 号 発行者:災害ボランティア オールとちぎ
〒320-0027 栃木県宇都宮市塙田 2-5-1 共生ビル 3F TEL028-622-0021 E-mail:all_tochigi@yahoo.co.jp

9月の連休は能登半島で

9月19日にさくら市を出発し、石川県七尾市の祭り見物に行ってきました。今回は栃木より4名で参加しました。能登半島地震が発生し

てから熱心に通い続けた村井さんからの誘いです。初めて参加するお祭りに、何をどうすればいいのかわからず、戸惑いながらも地域の方と一緒に旗杵を担ぎ、時には走ったり、倒したり。独特の音色に合わせて1つの旗杵を操る連帯感と興奮は祭り特有のもの。みんなで力を合わせ、タイミングを合わせるのは初めて参加するものにとっては、とても大変でした。皆さんに迷惑かけてないか心



ボラ待ちやくら

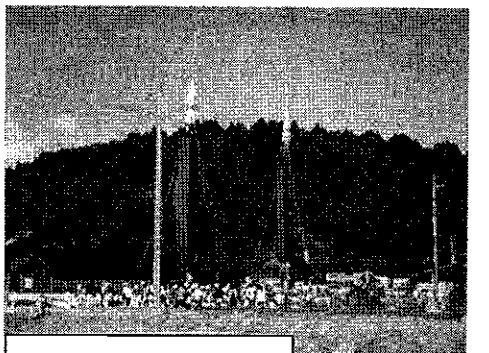


栃木のもみー隊長とTさんと、日本ではなかなか会えない吉椿さん

配です。早朝から始まり、夕暮れと共に終わりを迎えるこの祭り。達成感、充実感、疲労感などなど特に事故もなく、無事終了しました。しかし、疲れた。来年も是非とも参加したいと思います。地区のみなさま、ほんとにありがとうございました。これも復興支援の一つの形なのかな。(もみー)

能登の祭り 男の祭り 七尾のお熊甲祭り

9月20日に曜日に関係なく開催される能登半島、七尾市の祭り見物に栃木より4名で、シルバーウィークの渋滞の中、能登に向かいました。能登半島地震が起きたのは、2年半前の3月。立て続けに日本海側で起きた地震。その被災地に通い(村井氏)、能登の風土や人の取材から繋がった今回の祭りへの参加。祭りと言えば、その地域の人達のもの。地域の神仏や習わしなどにのっとり、その地域の五穀豊穡等を願って行われているもの。全国でも、神輿の担ぎ手が足りずに祭りに参加することができない地域もあり、祭り自体もなくなってしまっ



電柱より高い、旗杵



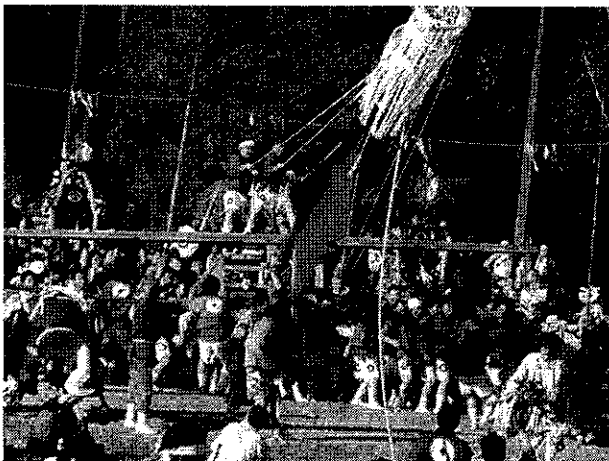
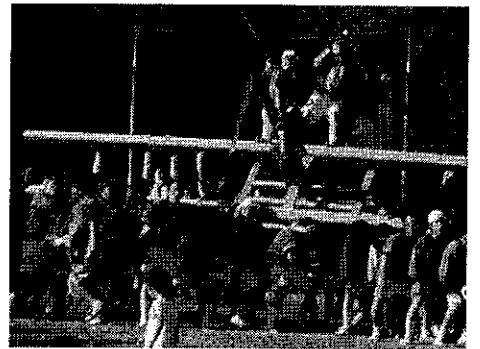
ところも出ているようです。今回、参加させていただいた七尾市中島の小牧という地域も人手不足に頭を悩ませていた地域でした。そんな地域の伝統行事によそ者が参加してもいいのだろうか？だれもが悩むことなのではないか？しかし、地域の若衆だけでは成り立たなくなっている現実。そんな地域の皆さんの声を聞き、参加させていただきました。といっても私は一応女性ですので、男衆の担ぐ神輿や旗杵を見物する人。



各地域から集まった神輿などが17基並びます。本当は19基あるものの、参加困難な地域があるようです。地域の神社にお宮入。順番に、威勢のいい掛け声と共に、旗杵を揺らして入って行きます。それぞれの地域には、1基の神輿に2基の旗杵。総勢50名程が祭りに参加します。先頭、猿田彦神の舞を踊る人、太鼓や鐘のお囃子(?)、太鼓を担ぐ人、神輿や旗の担ぎ手、旗杵を4隅で支える人、お神酒を配る人、その準備や後始末をする人・・・すべて男衆が取り仕切ります。見物する者には初めて

のお祭りに、どうなっていくのか進行がわからない??ことが多く、また、待つ時間もあり・・・しかし、旗杵を振りかざす(?)動きには、圧巻です。男衆の凛々しハッピー姿のみならず、1トン(?)もの重い旗杵を担ぎあげ、天の神様の目にとまるようその重い旗杵を派手に振り回す姿は、心を揺さぶります。見ている誰もが、旗杵が揺れるのを見ては、ハッと息をのみます。

神社に宮入した後、また朝出発した場に戻って行きます。その場では、祭りのクライマックスが！旗杵を見物客ギリギリまで倒します。旗杵の先端でかつら(文金高島田)を触る仕草から“シマダ倒し(流し?)”と言うそうです。観客の驚きの「あー」から「おー」という歓声へと変わるその時が、祭りの終演。早朝から始まり、夕暮れと共に終わりを迎えるこの祭り。男衆による独特の太鼓や鐘の音が、いつまでも七尾の町に響きわたります。



この七尾の“お熊甲祭り(おくまかぶとまつり)”には、よそに出て行った人達も仕事を休んで参加するのだそうです。地域に根差した祭りが羨ましく思えました。そんな祭りを支えている男衆。そして、表舞台には出ないけれど、勇壮な男衆を影で支えている女性陣。地域にお邪魔すれば、よそから来た私たちを、「よく来てくれたね〜」と、快く迎え入れてくれるおばあちゃん達。だれの顔も晴れやかでした。地域の伝統行事に触れ、地域を守る、人の温かみを感じさせてもらいました。悠久の時を超えて続くこの祭り。地域を愛する心を改めて考えさせられました。ありがとうございました。(青)

「とちぎVネット災害救援ボランティア基金」へご寄付を

郵便振替 00360-4-38111 名義:とちぎボランティアネットワーク ※通信欄に「災害」と明記してください。

オールとちぎ通信

平成 21 年 11 月 4 日 災害ボランティア オールとちぎ発行 第 176 号 発行者:災害ボランティア オールとちぎ
〒320-0027 栃木県宇都宮市埴田 2-5-1 共生ビル 3F TEL028-622-0021 E-mail:all_tochigi@yahoo.co.jp

くりこま耕英と花山を訪ねて

新潟中越地震から5年が経った。被災地では5年の節目での追悼・復興イベントが各地で開催された。しかし、マスコミで災害被災地が取り上げられるのは、地元以外ではこのような節目のときがほとんどで、すでに過去のこととして風化が進んでいる。

岩手・宮城内陸地震から1年4か月、被災直後に大きく取り上げられた土砂に埋没した「駒の湯温泉」の映像もすでに風化が始まっている。首都圏では震災から1年目の6月以降、この被災地の記事を目にする事はない。

かくいう我々も、6月と8月に訪問以来、新潟には足繁く通っているものの、宮城は足が遠のいており、心にいつもモヤモヤとした気持ちを抱えたままでした。

そんな中、10月17日の災害復興学会で学会の会長である室崎先生から声がかかった。栗駒や花山の被災地を訪問したいが10月24日に仙台に行くので翌25日に案内してもらえないかという依頼である。

早速、くりこま耕英復興の会の大場会長と花山復興の会の伊藤事務局長に連絡をとり、25日午前中にくりこま耕英地区、午後から花山地区をそれぞれ訪問し、現況について話をさせていただくこととした。

朝6時に矢野、君嶋で栃木を発ち、8時30分に仙台駅前で室崎先生をピックアップし、一路目的地へ。途中の岩ヶ崎の市役所総合支所で通行許可証の交付を受け、栗駒山への坂道に向かうと、標高が高くなるにつれ周辺は木々が色付き、一足早い紅葉が見事なまでの錦絵を織りなしている。その葉影に大きな崩落現場が顔をのぞかせている。ただ、復旧工事は相当進捗している印象を受けた。



途中、熊谷養魚場前で清涼飲料水の自動販売機に商品を補充している熊谷さん親子を発見してしばし立話。自販機の横には見事な高原大根が山積みになり、1袋(6~7本入り)200円の表示。早速お土産に購入。

熊谷さん宅では養魚池の復旧は翌年になる見通しで、イワナ養魚が被災前の規模まで回復するのは2年後の見込みだという。その間の生活維持が大変そうだ。

現在通行許可は制限されているが、一昨日からイワナ養魚や民宿等の事業者についてのみ、自分のお客様へ通行許可を与えてよいということになったとのこと。それ自体は一步前進だが、「なぜ、紅葉が終わろうとしている今の時期なのか?例えば10月1日からであればある程度の収入も期待できたのに・・・」とその対応に対しての疑問も。

大場会長宅へ向う。8月に訪問した日は住宅の上棟式であったが、すでに建築工事は終了し、2日後には入居するとのこと、3人の腕白小僧たちも大喜びしていた。主力のイチゴの「サマーキャンディ」は11月初旬まで収穫予定でまさに最後の時期。もうすぐ雪が訪れてすっぽりと雪に覆われるため、冬自宅も始めなければならぬ時期でもある。





イチゴは、原苗の確保の問題から、今年は例年の1割程度しか作付ができず、来年が5割程度、被災前と同じ程度の面積である約20アールまで戻るのは2年後になる見通しで、まだまだ苦しい生活が続くのであろう。

大場さんは10年前に山の下に冬季用の家をローン借入れをして建築したが、今回被災した耕英の自宅を再建するため新たにローンを組んだ。今回は銀行の審査も非常に厳しく苦労したそう。返済終了は72歳になるとのことで、被災のために大きな負担を抱えることとなる。

この冬を山で過ごす世帯は、大規模イチゴ農家のTファームとKZ養魚場の2軒程度の見込みのようだ。自宅の再建が終わっても家族全員が山に戻るためには、道路の交通規制の解除等が大きく影響をする。地区の主要な産業である観光の再生が大きな課題であり、観光客が戻らないことには地区の復興のスタート地点にも立っていないことになる。

室崎会長からも、いくつか質問があり、特に義援金の配分や長期避難での生活費の問題、「災害保護」といった概念での制度の構築等での意見交換をした。今後の復興のあり方、支援のあり方等で、ここでの経験を十二分に反映させなければならない。

そして、地域よっての「復興格差」を生じさせてはならないと強く感じたところである。

話は尽きずに昼どきとなり、来る途中で矢野ボスが購入したおにぎりとお漬物をいただいた。

その後、耕英を後にして花山へ。浅布や小川原の崩落現場を経て、大山前復興の会会長宅を拝見。まだ仮設住宅で生活されているため無人のお宅の東側の山は、反対側が崩落しており大山さん宅側も上部に亀裂が入っているとのことで、生活するには大きな不安があるが、行政側では安全性について一切判断がないとのこと。



その後、伊藤さんが経営する蕎麦店「ざらぼう」へ。日曜日ということもあり店は多くのお客さまで溢れている。少し待って我々も伊藤さん自慢の美味しい手打ちそばをいただく。その後、伊藤さんから花山地区の現況について話を伺った。

紅葉シーズンを迎えて、観光客も相当あるとのことだが、その半数程度が温湯山荘の温泉客、残り半数が被災現場



を見に来られた人だろうとのこと。

観光客が戻りつつある中で、課題も多い。佐藤旅館は建物のすぐ裏手の山が崩落の危険性が高く、その場所での再建は難しいかもしれず、また湯ノ倉温泉の再建にも解決すべき課題が多く、再開するまでにはまだまだ時間が必要となりそう。何よりも源泉確保のめどがまだ立っていない。



また、どの程度の世帯が被災前の自宅に戻るのかも大きな課題だ。現在、花山では3世帯で避難指示が解除されていないが、解除された地区でも従前の自宅に戻る人が3割程度と推測され、浅布地区では33世帯のうち9世帯、金沢地区では11世帯のうち1世帯にとどまっている、いまだ明確な方向性を打ち出されていない世帯もあるようだが、このままでは地域のコミュニティが崩壊してしまうのではないかと大きな不安を抱えている。

被災前の自宅に戻らない世帯は、仮設住宅横の住宅団地内に土地を求めての移転と他の地域に転出されるケースに区分され、ほぼ同じくらいあるそう。金沢地区は道路が狭く復旧工事車両の通行で一般車両がすれ違

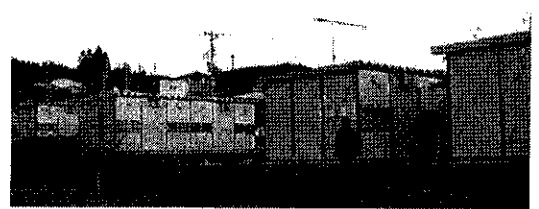
うことが困難で、住宅再建の工事車両がなかなか入れないとの事情もあるようだが、宅地や農地の亀裂も多く被害が特にひどいらしい。

また、国道が秋田まで開通しないことには、観光客のさらなる増加も見込めず、花山のみならず秋田県側の湯沢市小安境温泉も大きな打撃を受けているとのことで、湯沢市として宮城県や栗原市と協議の結果、週末に限定して東北新幹線のくりこま高原駅から湯沢市までチャーターバスの運行を開始したそうだ。



一方、復興住宅の市の対応にも疑問が残る。栗原市では本年度復興住宅の建設のため4千万円程度3棟分の予算を組んでいたが、花山地区で希望を取りまとめたところ5~6件の希望が寄せられた。その対応で市は本年度の予算を執行せず（流して）、翌年度対応する方針に転換したそうだ。しかし、その対応に疑問を感じるの自分だけだろうか？本年度分は早期に建築して優先度の高い人から入居していただき、翌年度に改めて不足分を建築すればよいのではないだろうか。

仮設住宅の入居期限は来年の6月まで。単に期限を延長すればよいとの考えもあるが、被災者の方々の気持ちを推し量れば、1日も早く被災から立ち直りたいと考えているはずであり、そのためにも1日も早く新たな生活のステージを提供することも大切なのではないだろうか。



復興での取り組みでの資金確保としての災害復興基金が設置されていれば、各種の取り組みを推進することができたのではないかと意見は共通認識であった。宮城県は復興基金を設置しない代わりに栗原市へ7千万円を交付金として交付したが、その用途に関して被災者の個人資産に関するものには使用しないことと制限を加えた。しかし、現行の被災者生活再建支援法等で個人へ直接現金を交付しており、また、産業支援では特定の企業・事業者へ補助金を交付していることをみれば、被災からの復興や地域振興のために個人・世帯を支援することにどのような問題があるのか、違和感を禁じえない。



室崎会長、矢野ボスとともに復旧や復興段階での「災害復興基金」「災害保護」「行政支援」等の課題とともに、今後の「地域づくり」の話題まで幅広い意見交換をさせていただいた。改めて復旧・復興での課題等が明らかにできたことと思う。くりこまや花山の被災者の方々に速やかにフィードバックすること

は困難な面はあるが、今回の各種の災害対応を学習材料として、今後もし災害が発生した場合には、同じことを繰り返すことがないよう、災害復興学会内でも検証と改善を進めていくことが求められる。

伊藤さんからは「この地を終の棲家として暮らしていきたい。そのため、空家の有効利用や外部から多くの人を呼ぶ仕組みづくりを進めたい。」との、非常に心強いお話をいただいた。

伊藤さんのような方がいることが非常に心強い。地域への愛着と熱意は何物にも代えがたい復興への推進力だと思う。

ただ、伊藤さんは左足を少しひきづっておられた、背骨が少しずれて神経を圧迫して痛みがあるためリハビリに通っているとのことで、蕎麦を打つのもきついらしい。身体が1日も早く回復して、ますます活躍されることを祈念したい。



次にくりこまや花山を訪れるときには、白銀の世界だろうか。復興への熱い思いを抱いた人たちに栃木の地からもエールを送りたい。(君)

「とちぎVネット災害救援ボランティア基金」へご寄付を

郵便振替 00360-4-38111 名義:とちぎボランティアネットワーク ※通信欄に「災害」と明記してください。

オールとちぎ通信

平成 21 年 11 月 8 日 災害ボランティア オールとちぎ発行 第 178 号 発行者:災害ボランティア オールとちぎ
〒320-0027 栃木県宇都宮市埜田 2-5-1 共生ビル 3F TEL028-622-0021 E-mail:all_tochigi@yahoo.co.jp

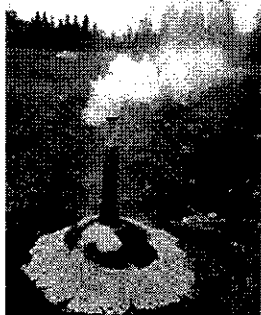
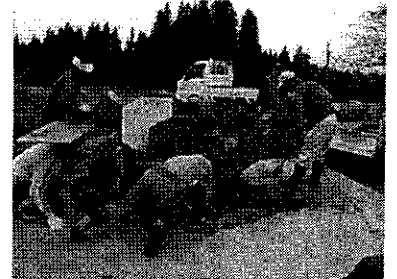
和南津そばの郷 5 度目の収穫

10 月 23 日で震災から 5 年を迎えた川口町に、そばの収穫に向かいました。いつもの調子でさくら市をでたものの、日光有料道路を下りた途端に渋滞に。忘れてました！日光の紅葉渋滞を・・・のろのろ運転しながら、平原綾香のジューピターを聞きながら 5 年前を振り返っていました。下野新聞のボランティア募集の記事が私を大きく変えました。休職中に会った災害ボランティア。初



めてづくしの被災地で、不安に襲われながらも被災地支援に奔走したあの頃。沢山の仲間に助けられました。(勿論、今もです)多くのボランティアが活動したことで出来た”栃木”の信頼。その信頼を何よりも大切にしたいという思い。いや責任感にも思える心の動きがあったと思います。だからこそ、こうして 5 年が過ぎた今も中越に携わっています。。。そんなことを思い出しながらの 1 時間半。渋滞を抜けるとあっという間に新潟でした。関越トンネルを抜けたあたりは、紅葉が見ごろ。

そば畑に到着する頃には作業も終盤を迎えておりました。遅刻してゴメンナサイ 前回のサツマイモ掘りに続いて I さんご家族も参加。子供たちもそばの刈り取り作業頑張ったそうです。(写真がなく残念)栃木からは私以外に、黒磯の O 島さんも参加してくれました。



刈り取りが済み、、、 作業開始前にもみ殻に入れておいたサツマイモ。まだ焼けないかな～～～？ ということで私が夜なべして作った和南津産のサツマイモのスイートポテトの登場です！沢山作ったので水分が多く、少し・・・でしたが、皆さん美味しいといって食べてくれました。夜なべした甲斐がありました。そうこうするうちにもみ殻の中のイモ達も食べごろに。早速ほおばるお母さん達。それをみていて普段お芋など食べな



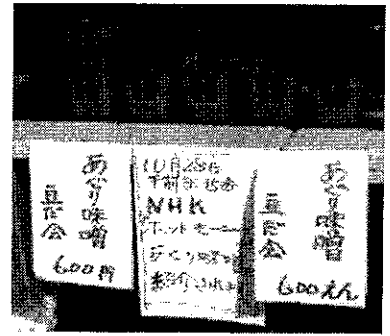
おイモ、おいしー！

いお父さん達が「うまいな～」といってほおばる。そば畑の隣の大根の間引きをしていると子供達が「やりたいたい！」と言いだします。お母さんたちに教えてもらいながらの大根抜き。尻もちをつきながらも、次から次へと大根を抜きます。「もうおしまい…」といってもなかなか楽しいようで、結局大量の大根がお土産になりました。今回は、そば打ち、昼食会はなし。来月あたりにそばの収穫祭としてそば祭りが開催予定です。今年こそ、和南津の皆さんに振る舞えるかな?? ちなみに今年の収量は、昨年よりも少なめだそうです。(残念)



豆だ会、NHKに出る!

その後、ナカヤチさんちで昼食をいただきました。「豆だ会」で味噌作り仲間のk宮山さんも一緒です。こちらの「豆だ会」は、震災後に始まったグループ。川口産の大豆とナカヤチさんの作った麴と塩で一切添加物の入っていないこの味噌「あくり味噌」と言います。道の駅”あくりの里”で販売しています。このあくり味噌、味が好評です。この度、NHKの番組で紹介されます。10月28日(水)朝8:35~のホットモーニングの番組内で紹介されることになりました。先月からNHKの方が、何度も撮影・取材に来られたそうです。



木沢でお手伝い! かぐらなんぼんの辛さに涙

その後、木沢に向かいます。特に予定は入れてなかったのですが、平澤さんからのコールが!明日のピザ焼きの準備がまだだそうで、お手伝いをすることに。私はピザにトッピングする野菜などを切る担当。トマト、玉ねぎ、かぐらなんぼん? ピーマンじゃなくかぐらなんぼん!? 青「平澤さ~ん、かぐらなんぼんを使うの?」と聞くと。平「あれ一間違っただけでも試しに切って食べてみる。はじめは辛い...?」しかし、数秒後、唇がはれるくらいの辛さに撃沈。(マジではれた)安田屋さんにピーマンを買いに走りしました。

夜は、ナカヤチさんちでよ~れっこ。イサプロウさんも来て、5年前を振り返ります。「あいつはどうしてる?あの大きい奴!(て~すけね)」「M形さんは?」「長いのは?(Y本君ね)」などなど。お母さんが作った大根の煮物がめっちゃ軟らかく美味しい!旬のカリフラワーもテーブルをにぎわせます。~仮設に青いカッパ姿でよく来たね~ ~Sさんがすごい剣幕で屋敷に来たこともあったなあ~ ~凄い雪だったよね~ 話はつきません。。。オヤスミナサイ

栃木人、川口の味噌を売る!?

25日、午後からの絆の道ウォークがあるだけで予定のない私。昨夜のよ~れっこのお礼にと、川口町で開催する物産展“響”で、あくり味噌を販売することになりました!ナカヤチさんが会場まで味噌を搬入。味噌だけおいてまた和南津に戻って防災訓練へ参加。私はというと、あくりの里他の皆さんと、テントで販売開始。「28日に、NHKで紹介されま~す」という声かけでお客さんが反応してくれます。買ってくれなくとも、テレビ見てね~とPR。それが功を奏したのか、22個用意した”あくり味噌”は、屋前に完売!!そこへナカヤチさん登場。「成績いいなあ~売れるんならもっと持ってこよう~」と追加で13個を搬入。私は、午後から和南津に行く予定。それまでになんとか売り切りたい!と商売っ気丸出して声をあげます。和南津に行く時間が迫る12:30、見事に完売。今日一日で35個を販売しました。一緒に販売した方々に褒められて上機嫌の私。単純なのだ(笑)

木沢の平澤さんも昨日準備をお手伝いした震災米ピザの販売。石窯でピザを焼いていました。物産展には、遠く静岡のお茶屋さんも出店していました。各地の名産品



を食べ歩き...はできませんでしたが、川口町人ではないのにあくり味噌を宣伝している。まあ、なかなか出来ない経験をしました。それにしてもあくりの里のつきたてのお餅には、長蛇の列が並んでいました。



絆の道ウォーク 今年も“愛”の甲

で午後からは和南津。味噌の売り子で多少の疲れを感じながらも今年で4回目の絆の道ウォークに参加します。ボランティアの参加は私一人。。。今

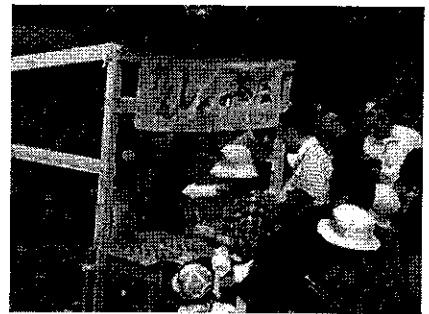


年は、仮装はなしで皆で“愛”のかぶとを頭に付けます。やはり「天地人」人気は大きいようです。1:30 集落センター



を出発し、峠の“かんしゃの茶屋”で、一休み。団子にお茶におしるこ、麦酒になぜかカンパンも。一休みの後は、皆で「和南津クイズ大会」の始まり

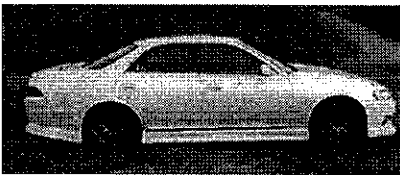
です。わくわくの丸山代表が〇×ゲームのクイズを出します。和南津の人口は？ 和南津小学校が閉校したのは？ トンネルと橋、どっちが長い？ 神社の駒犬の向いている方向は？ などの質問。答えが出る度に、歓喜の「おー！」が起こります。なぜかクリアする栃木人の私。見事に最終の11名まで残りました。**最後のクイズ** 神社裏の杉の木は、66本？56本？どっち？ これには和南津の皆さんも参った。1対10に分かれて、クイズの結果は一人で66本を選んだ、もんきちさんが優勝！クイズの当選者には商品が！ちゃっかり私もいただきました。



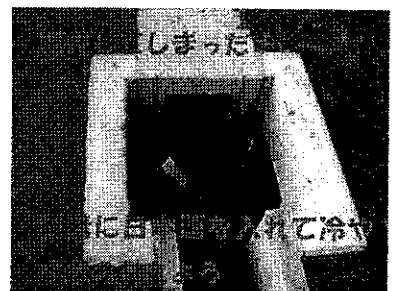
そんなひと時を過ごして下山。この日は、小学校が文化祭？で子供たちは学校でした。皆さんが集落センターに戻った頃に子供たちも下校してきました。今度は、集落センターでの交流会。復興支援センターの春日さんが作ったDVDの映像を見ながら震災からの5年間を振り返ります。わくわく和南美のホテルや花笠甚句、和南津そばの郷、那須での交流や宮城への応援の様子。そして、BBVとの交流の経過なども紹介されました。和南津の皆さんの、地域を思う熱い気持ちがうかがえ、目頭があつくなりました(涙)



その後は、センターでビンゴゲーム大会。商品には、防火警報機！やラーメンつり吉のラーメン券などが並びます。皆さん、目が必死でした(笑) のんびりとした交流会、一緒に楽しませていただきました。交流会の途中で私は退席させていただきました。



帰り道、車高の低い車を発見。Y吾の車でした。今年高3のY吾。でも誕生日が3月なので免許が・・・まだ運転する



のお預けの様子。そんな話をしていたらY吾のばあちゃんが土産に持ってけと野菜を沢山いただきました。うちの台所には、和南津産のジャガイモ、サツマイモ、カリフラワー、大根、白菜、ネギ、キャベツ、柿が並びます。幸せ者だなあ〜とつくづく感じました。心地よい疲労感の中、幸せいっぱい栃木に帰ってきました。和南津の皆さん、お世話になりました。(青)

「とちぎVネット災害救援ボランティア基金」へご寄付を

郵便振替 00360-4-38111 名義:とちぎボランティアネットワーク ※通信欄に「災害」と明記してください。

オールとちぎ通信

平成 21 年 12 月 21 日 災害ボランティア オールとちぎ発行 第 185 号 発行者:災害ボランティア オールとちぎ
〒320-0027 栃木県宇都宮市塙田 2-5-1 共生ビル 3F TEL.028-622-0021 E-mail:all_tochigi@yahoo.co.jp

—静岡県三島市と神戸長田区での中心市街地活性化の取り組み事例—

昔ながらの「駄菓子屋」と「鉄人28号」で元気を与えたい

三島では

静岡県は、東海地震の発生確率が高く、防災意識の非常に高い県でもある。その静岡県三島市の災害ボランティアコーディネーターの団体から講師として招かれ、矢野ボスと柴田隊長、君嶋で話をさせていただく機会を得た。

三島市は、鎌倉幕府を開いた源頼朝の挙兵に際して戦勝祈願をした三島大社の門前町として、また東海道の宿場町として栄えた町である。また、柿田川湧水群に代表されるように富士山からの伏流水での水の豊富な土地としても知られており、うなぎが名産で市内各地に鰻屋がある。



三島大社の鳥居前から南に延びている通りは、電線地中化がなされ、道路もブロック張りできれいに整備されているが、やはり活気が失われつつある通りでもある。この日本全国共通の課題に対して、各地でいろいろな取り組みがなされているが、この三島の地でもユニークな事例を発見した。

市役所の別館（防災課や災害時の防災本部室のある建物）がこの通り沿いにあるが、その斜め向かい側に大正時代の古い商家があり、壁面は銅板吹きで緑青で緑色になっている。

もともとは、洋服商であったそうだが、有名な映画監督の奥さまのご自宅でもあり、現在は三島市の指定文化財に指定されているそうだ。

中には、長椅子とストーブ、そして、お茶セットが置かれて自由に休憩できるスペースがあり、そして、駄菓子屋ともなっている。昭和のあの懐かしいお菓子やラムネ、酢いか、冷やしあめ、メンコ等が並び、自分たちの子供時代を彷彿とさせる風景が目の前にある。

店番をしていた初老の男性に話を聞くと、空き店舗対策として短期間で数種類のチャレンジショップを展開したが、その中で一番にぎわいの創出となったのが駄菓子屋だったため、所有者から3年間の期間限定で借りて運営しているとのことであった。

平日はあまり人通りがない通りではあるが、三島大社の祭礼等の際には1日当たりで1千人を超える時もあるとのこと。子どもたちにも大変喜ばれているようであり、ちょうど母親に連れられてきた3歳くらいと思われる男の子は、お金を使って自分でモノを買うことを母親から教えられていた。欲しいものを絞り込む悩ましい表情がほほえましかった。



長田では

中心市街地の空洞化の進展にともなう活性化の課題は、先月訪れた阪神淡路大震災の被災地である神戸の長田区でも顕著であった。

長田区は駅前が地震後の火災で非常に広範囲に消失し、その後の区画整理等により新しい街並みとなったが、それまでそこに住んでいた人たちは家賃の高騰等もあり、他地区に転出せざるを得ない状況となり、結果的に商店街の従来の顧客減少が顕著となり、シャッター通り商店街になりつつある。

そのような中で、漫画家の横山光輝氏の出身地である関係から「鉄人28号」のモニュメントが完成した。訪れた日は休日でもあったことから多くの見物客があり、子どもたち（というよりは、その親？）の歓声があふれていた。

しかし、その公園から少し足を伸ばして商店街を南下すると、人通りは極端に少なくなり、休日にもかかわらずシャッターが下りた商店が目立つようになる。

それらの空き店舗を利用して、やはり横山光輝氏の漫画にちなんで中国の「三国志」関連の展示がなされていた。まばらではあるが、それらの見学の人も見受けられたが、まだ全体の活性化までには至っていないのが現実のように見受けられた。



被災からの復興は息の長い取り組みである。復興には都市計画的な将来に向けた「防災」の視点が不可欠であるとともに、そこに生活する人たちの「生活」への配慮が求められる。「生業の再建」と被災者の「心の復興」、そして「被災地域の活性化」、また、兵庫県の佐用町の水害のように、山林そのものに手を入れて管理をしなければ、根本的な解決が困難な場合もあり、復興への取り組みは、日本各地で展開されている「まちづくり」「地域づくり」「自然・環境との共生」の取り組みでもある。

長い年月が過ぎたと思われる阪神淡路大震災の被災地では、今でも被災から立ち上がるために多くの取り組みが続けられ、そして、震災を風化させずに未来に引き継ぐとともに、各地の被災地にその経験知を積極的に提供しようとしている。

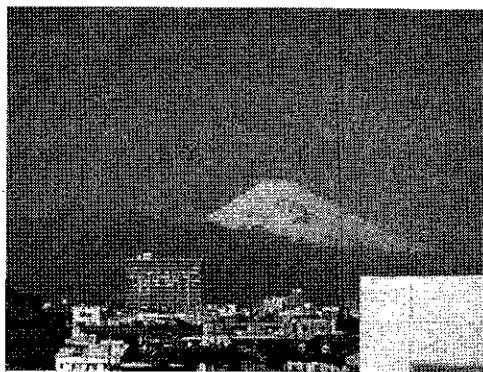
そして、これから来るであろう巨大災害に備えて、自分たちが地域で何ができるのかを模索し、悩み続けている人たちもいる。

「この世の中には2つのことがある。『どうにもできないこと』と『どうにかできること』」

中越地震の山古志村で実際にあった「マリと子犬の物語」の映画の原作の冒頭にあった言葉である。

人間の力では回避することのできない災害、でも事前の備え等で防ぎ、減らすことが可能な事柄も多い。

被災で苦しむ人が1人でも少なくなるように、少しでも多くの経験知を伝え、そして、不幸にも被災してしまった人たちとは、被災後の苦しみを少しでも分かち合い、そっと背中を押せるようなことができれば。そのために「今できること」を積み重ねていければと思う。(君)



「とちぎVネット災害救援ボランティア基金」へご寄付を

郵便振替 00360-4-38111 名義:とちぎボランティアネットワーク ※通信欄に「災害」と明記してください。

オールとちぎ通信

平成22年1月6日 災害ボランティア オールとちぎ発行 第186号 発行者:災害ボランティア オールとちぎ
〒320-0027 栃木県宇都宮市塙田2-5-1 共生ビル3F TEL028-622-0021 E-mail:all_tochigi@yahoo.co.jp

薄く雪化粧をした花山を訪れて —復興に向けた取り組みを—

災害被災地では、その地域の内包する課題や懸案事項が一気に噴出する構図となる。たとえば、農山村であれば、若者の都市部への流出に拍車がかかり、過疎化・高齢化の進展はより一層顕著となる。

2008年6月に発生した岩手・宮城内陸地震。この被災地では「くりこま耕英」地区が大きくクローズアップされ、イチゴやイワナ等での復興の取り組みが全国に発信されていった。

その一方で、同じ被災地であり同様に自宅を離れて避難所生活を余儀なくされた「花山」地区は、全国的にはどの程度認識されていただろうか。

この地震を象徴する「駒の湯温泉」の映像が繰り返し流され、「山に帰る」を合言葉にほとんどの世帯が被災前の生活に一日も早く戻ろうと取り組む耕英地区に対して、花山地区は被災前の故郷を離れる決断をする世帯が多く、それまでの地域コミュニティが維持できるかが危ぶまれる集落もある。

たとえば、花山でも奥に位置する浅布地区は、被災前33世帯であったが、自宅に戻る判断をした世帯は12~13世帯になる見通しで、被災を契機に一層の過疎化・高齢化が進むことになる。



その主な要因としては、今後の同様の災害での被災の不安、そして若者の就業の場がないために就業しやすい町中心部に転出する傾向が、被災での住宅再建に際してより一層顕著になったものである。結果として、地区には高齢者のみが残る構図となるのである。

そのような中で、復興に向けた地域内での模索も始まっている。たとえば古民家を活用した地域振興策、そして花山の高齢者の知恵でもある「暮らし」や「文化」を伝承できるような仕組みをぜひ進めようという構想である。

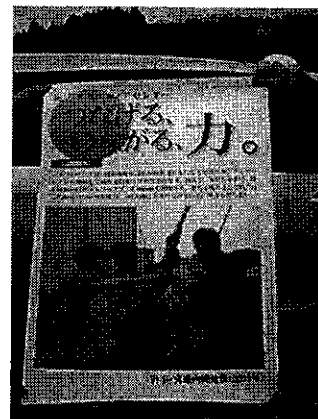
これまでの被災地での復興段階では、やはり、自分たちの地域の暮らしを見つめなおし、それを大事にしていく取り組みの大切さが語られ、自宅の再建でも地域の住まいの文化を大切にしたい取り組みもなされている。

花山においても、その地域固有のものを大切にするとといった視点の重要性に気付き、そして、外部との積極的な交流による地域活性化に取り組む必要性を考えている熱い人達がいる。

しかし、その取り組みにはいくつかの課題がある。



飛来した白鳥たち



目指す古民家

その古民家は外観は特に特徴もなさそうだが、屋内に入ると中には一抱えもあるようなとても太い梁がいくつもあり、仙台市教育委員会からその材料を譲ってほしいと打診があったものを、持ち主に交渉して断ってもらったそうだ。話によれば、建築自体は地元の大工ではなく海沿いの気仙沼方面の大工によるものではないかとのことで、浅布地区を見下すロケーションにある。

ただ、古民家に至る道は整備が必要で、川を渡る吊り橋の問題や、来訪者の駐車場、地震で枯れてしまった水源の確保等々の課題も多々ある。

何よりも、まだ地域でコンセンサスづくりに動いていない要因は、資金調達の問題である。その見込みがない中で地区の人たちに提案することをためらっている側面もある。

しかし、温泉観光や農林業以外に就業の場がなく、新たな経済効果を期待されるものがない中で、地域活性化の起爆剤としての効果、経済的効果が期待される。

それとともに地域の復興を目指していく中では、地域全体での取り組みは非常に重要であり、この取り組みに多くの地区住民が関わることで、同じ目的に向かっての一体感も醸成されるはずである。

全国には似たような事例は多く見受けられる、しかし、花山には花山の暮らしや文化を大切にしたい「花山モデル」での事業展開が不可欠である。

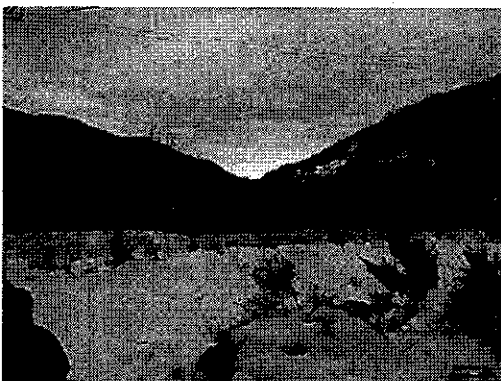
そして、何よりも地域内、宮城県内、そしてより広範な賛同者や協力者のネットワークを構築することが大切であり、多くの方々の知恵が不可欠である。ぜひ多くの方に興味を持っていただき、支援の輪が広がることを期待している。

被災者に対しては、いまだ復興住宅建設の工程は明確に示されていない。その一方で仮設住宅の入居期限は原則として7月までの2カ年であるため、被災者自体はこの冬期間に生活拠点をどこにするかの最終決断をすることになるであろう。今後、何世帯が花山に残る決断をするであろうか？

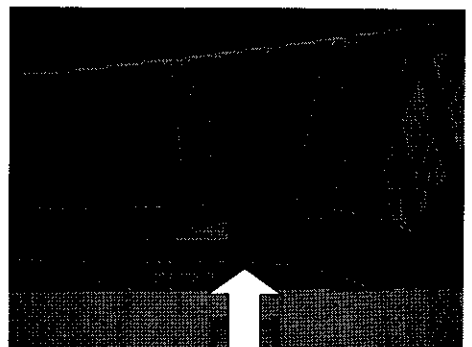
復興に向けた取り組みは、被災者の方々が住宅についての決断をするであろう今の時期に動き出すことが望ましいと思われる。しか

し、そのために課題解決の努力を早急に進めることが求められている。

(君)



軽トラも通るつり橋



見づらいが、かなり太い梁

「とちぎVネット災害救援ボランティア基金」へご寄付を

郵便振替 00360-4-38111 名義:とちぎボランティアネットワーク ※通信欄に「災害」と明記してください。

「輪島市災害ボランティアの会」の取り組み

輪島市災害ボランティアの会代表

三谷 みはる

1、「輪島市災害ボランティアの会」に取り組むこととなった経緯

○輪島市（震災当時）：人口 33,822 人／世帯数 13,138 世帯

○能登半島地震

平成 19 年 3 月 25 日（日） 午前 9 時 41 分 震度 6 強 M.6.9

人的被害 死者 1 名 重傷者 46 名 軽傷者 69 名、平成 19 年 4 月 25 日：激甚災害指定

* 輪島市社協より輪島市ボランティア連絡会の有志に対して協力要請 地震発生より 5 日目（4 月 30 日）

* 「輪島市災害ボランティアセンター」に参加協力（4 月 31 日）

初日は 14 人参加、その後 1 日に 5,6 人ずつセンター閉所後まで出勤

- ・災害ボランティアセンター運営の手伝い
- ・小学校入学式準備の手伝い（さくらメッセージ）
- ・様々な支援物資の袋詰め・配布
- ・災害ボランティアセンターの行事の手伝いなど

2、ボランティア活動の状況

1) 災害後のこと（仮設住宅完成後）

* 「能登半島地震これからの支援を考える会」にて「輪島市災害ボランティアの会」発足（5 月 11 日）

- ・輪島市ボランティア連絡会（23 サークル）を中心に
- ・活動の 3 本の柱

①仮設住宅での活動（月 1 回程度） ・ふれあい喫茶、ふれあい食事会

②災害ボランティア講演会 市内全中学校

③伝えようみんなの声

- ・他の地域の人と連携を取りながら活動する。「輪島・日野ボランティアフォーラム」の実施など

2) 活動の特長

- ・物理的復興ではなく、心の復興
 - ・ボランティア連絡会が母体
- ・被災地の地元住民のボランティア団体（共に復興への活力を得る）
 - ・市内のボランティアサークルが普段の活動で参加
 - ・社協、健康推進課・地域包括センターなどの行政との連携
 - ・他の被災地との交流（鳥取県日野町など）

3) 今後の展望・課題

- ・自分たちの被災体験を次世代や他の地域へ伝えることで「たすけあいの心」育む
- ・普段の活動を大切に、どのような「つながり」「きずな」を作っていくか
 - 「災害」ということをどんな形で「ボランティア連絡協議会」の活動に取り入れていくか
- ・いざと言う時、「たすけて！」と声をあげられる町に
 - 「災害ボランティアセンター」での経験から

輪島市災害ボランティアの会の活動 (H 19.3~H 20.9)

H19 3/30(金)	輪島市災害ボランティアセンター輪島 設立 (輪島市文化会館2階)	・3/30 輪島市社協より輪島市ボランティア連絡会の有志に対して、地元ボランティアとして「災害ボランティアセンター」へ協力してほしいとの連絡が入る
3/31(土)	輪島市災害ボランティアセンターに参加協力を開始	・3/31 初日14名参加 その後も多数のボランティアが継続的に参加協力する
4/3(火)	さくらのメッセージ作り(~5日)	 <p>※さくらのメッセージ 避難所として使用されていたため、入学式準備が遅れた小学校に飾られた</p>
7(土)	さくらのメッセージをかざりつけ (門前東・門前西小学校にて)	
15(日)	うるうる子どもパック詰め	
17(火)	ボランティアによる「千羽鶴」完成 (仮設住宅や小学校へ)	
21(土)	「なつかしい映画をみていっぶくしませんか？」 (「北国の少年たち」上映)	
22(日)	「元気にパンチ！パンチで元気！」 (うるうる子どもパックの配布)	
5/2(水)	あったらいいね引越グッズ作り①	
3(木)	茶碗配布の会準備	
4(金)	あったらいいね引越グッズ作り② 仮設住宅にて配布 (山岸18世帯、宅田6世帯)	
5(土)	あったらいいね引越グッズ作り③ 仮設住宅にて配布 (山岸7世帯、宅田7世帯)	
8(火)	アンサンブル金沢 ヴァイオリン・ピアノコンサート お茶碗無料配布の会 (うるうる親子パックの配布)	※うるうるパックとは… 「日本経団連1%クラブ」の呼びかけにより、各企業から届けられた被災者へのお見舞い物品をボランティアが袋詰めしたもの
11(金)	「能登半島地震これからの支援を考える会」にて 「輪島市災害ボランティアの会」発足	・4/28 仮設住宅へ引越し始まる
13(日)	あったらいいね引越グッズ作り④	※あったらいいね 引越しグッズとは… 仮設住宅へ引越の際必要な生活用品を集めうるうるパック同様袋詰めしたもの
19(土)	中学生が「災害ボランティアセンター門前」で 現地ボランティア活動の取材	
30(水)	「ふれあい食事会」活動について検討会	
6/5(火)	第1回ふれあい食事会(山岸仮設住宅) あったらいいね引越グッズ仮設住宅配布	
25(月)	「伝えようみんなの声」(子育て中のお母さん達の声)	
7/3(火)	ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅)	
7(土)	ふれあい喫茶 (宅田仮設住宅)	
31(火)	小矢部ボランティア連絡協議会と交流会	
8/19(日)	お見舞いのメッセージカード作り (新潟中越沖地震の被災地へ送る)	
21(火)	ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅) (児童センターの子どもたちも参加)	
22(水)	輪島市福祉大会にて三谷代表が パネルディスカッションのコーディネーターをする	
		・5/21 「心のケアセンター」開所
		・5/27 災害ボランティアセンター閉所 復興イベント(門前)
		・5/28 復興支援ボランティアセンター(門前・輪島)に名称変更
		※7/16 新潟中越沖地震

9/20(木)	中学生のための災害ボランティア講演会 「十代の君たちへ」 (松陵中学校一桑原英文氏)
10/12(金)	ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅) 「伝えようみんなの声」 (仮設住宅の皆さんの声)
11/18(日)	輪島市ボランティアフェスティバル参加 (活動写真掲示、「赤りんご・青りんご」のカードに メッセージを書いてもらう)
12/ 7(金)	鳥取県西部地震の被災地日野町訪問(～9日)
14(金)	ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅)
21(金)	中学生のための災害ボランティア講演会 「『あのとき』から『これから』へ」 (田野中学校一李仁鉄氏)
H20 2/6(水)	ふれあい喫茶 (宅田仮設住宅) ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅)
13(水)	中学生のための災害ボランティア講演会 「十代の君たちへ」 (上野台中学校一桑原英文氏)
14(木)	南砺市ボランティア連絡協議会との交流
26(火)	白山市ボランティア連絡協議会との交流
3/2(日)	中学生のための災害ボランティア講演会 「災害とボランティア活動」(南志見中学校一山下弘彦氏)
3(月)	中学生のための災害ボランティア講演会 「災害とボランティア活動」 (三井・門前中学校一山下弘彦氏)
10(月)	アンサンブル金沢・ふれあいコンサート (館・山岸仮設住宅)
23(日)	「感謝の集い」でさくらのメッセージ作り
4/2(水)	門前東・西小学校でさくらのメッセージを飾りつけ
18(金)	ふれあい食事会(山岸仮設住宅)
5/9(金)	ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅) 「伝えようみんなの声」 (障がい者の声)
23(金)	石川県社会福祉協議会研修会で講師 (三谷代表)
6/3(火)	ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅)
7/3(木)	ふれあい喫茶 (宅田仮設住宅)
4(金)	ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅)
21(月)	「輪島・日野ボランティア交流フォーラム」
8/5(火)	ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅) (『元気もりもり隊』も参加)
11(月)	石川TV「ボランティア21」で活動紹介
9/12(金)	ふれあい喫茶 (山岸仮設住宅)
20(土)	全国ボランティアフェスティバル(新潟)にて活動紹介
27(土)	羽咋市ボランティア研修会で講師 (三谷代表)

・11/18
輪島市ボランティア
フェスティバル
テーマ：災害とボランティア



・3/23
能登半島地震1周年感謝の集い
「まつりが復活する日」
(門前道下)

・6/6
輪島市災害対策本部解散
輪島市災害復興本部は継続

※6/14 岩手・宮城内陸地震

※「元気もりもり隊」とは…
山岸仮設住宅に住む子ども達と



友人が 中心となり
手品やクリスマス会
館分ゲーム大会など
企画。住民の人達か
ら喜ばれている

輪島市災害ボランティアの会 誕生

◇平成19年5月11日 ボランティアセンターを手伝った人が集まり
「能登半島地震 これからの支援を考える会」を開催

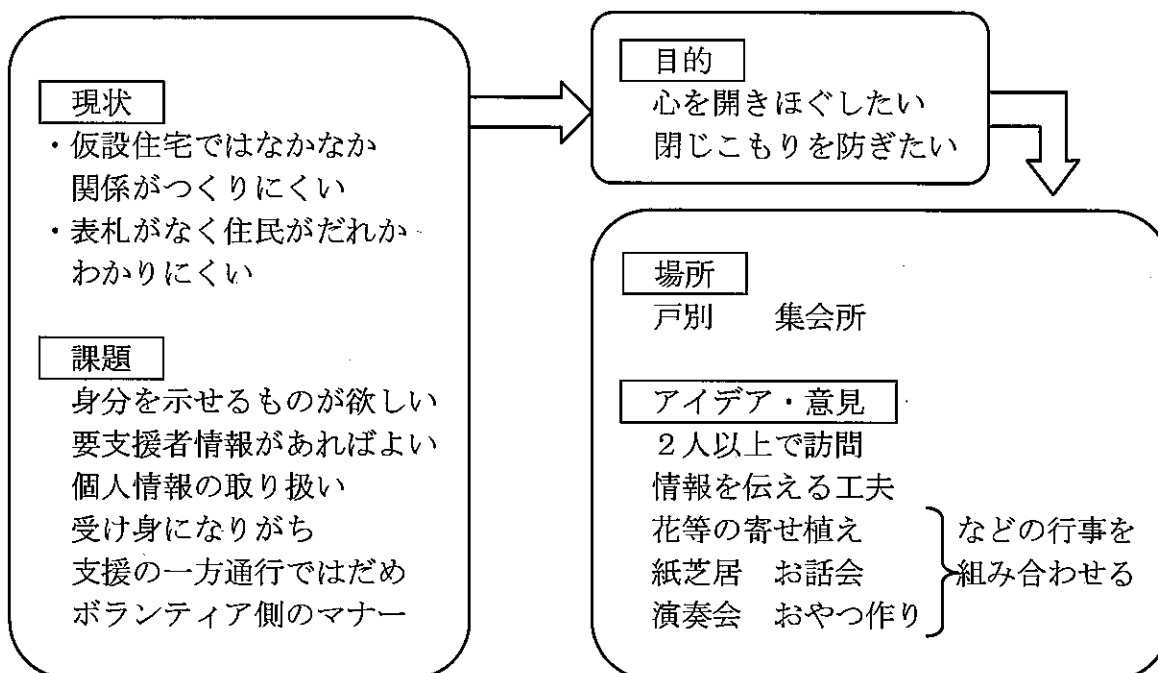
1. これまでの経過がそれぞれの立場から報告がされた。

- 輪島市ボランティア連絡会 会長
- 輪島市災害ボランティアセンター輪島 センター長
- 災害ボランティアセンターでの地元のボランティア代表
- 輪島市役所健康推進課 保健師
- 輪島市地域包括支援センター 保健師



2. これからの支援「見守りや元気づけ活動」について

[活動の切り口、場所など、だれが だれと一緒に] を考えてみた。
助言者・桑原英文氏（災害ボランティア活動支援プロジェクト会議委員）



3. これから活動するにあたって、[名称、事務局、方法] について検討した。

- 名称 輪島市災害ボランティアの会とする
- 組織 輪島市社会福祉協議会に事務局を置く
- 方法 輪島市ボランティア連絡会の会員を含み、輪島市役所健康推進課、輪島市地域包括支援センター、賛同する個人の会員等で構成し、スケジュールを考え、チラシを作成配布し、会員の協力のもと準備し行事を行う。

輪島市災害ボランティアの会

活動の三つの柱

仮設住宅での活動

- ・「ふれあい食事会」「ふれあい喫茶」を実施する。
- ・保健師による健康相談を同時に行う。
- ・市内ボランティアサークルが交代で参加・協力する。

仮設住宅の集会場に集い、住民同士の親睦やボランティアとの交流をはかる。

災害ボランティア講演会

- ・講師 震災時、輪島の災害ボランティアセンターで活動した災害ボランティアコーディネーター
- ・対象 市内全中学校

「地震を体験した中学生たちに、災害やボランティアについて改めて理解を深め、将来の地域作りや生き方について考えるきっかけにしたい。」中学生の子どもを持つ母親の声から実現した。

伝えようみんなの声

- ・活動の中で出会った方々の声を集めた冊子を作る。
- ・各地のボランティアグループとの交流会を開く。

震災の体験は、恐ろしくつらいことが多かった。それでも、この経験を他の地域や後世に伝えることは、被災した私たちの務めではないか。

「輪島市災害ボランティアの会」は被災地の地元住民のボランティア団体です。あの地震の恐ろしさを共有したものとして、お互いがいたわりあいながら交流を深め、共に復興をめざす活力を得ることを目標としています。

仮設住宅での活動

◇継続的に「ふれあい食事会」「ふれあい喫茶」を実施し、飲食を共にすることで、住民同士の親睦やボランティアとの交流を図ります。

◇毎回、輪島市健康推進課 保健師さんによる血圧測定があります。

心配や不安なことがあれば相談できます。

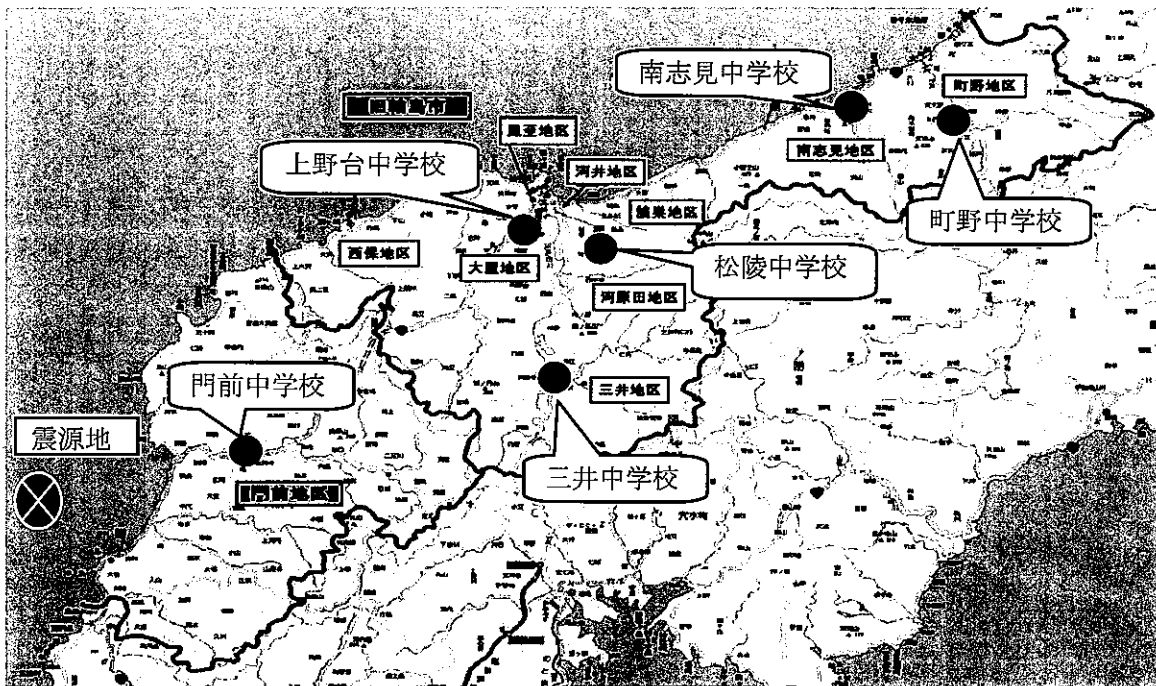
保健師さんも毎月様子を観察しているので、異常にはすぐ気が付きます。

◇輪島市ボランティア連絡会加入のグループの人たちが、交代で参加・協力しています。

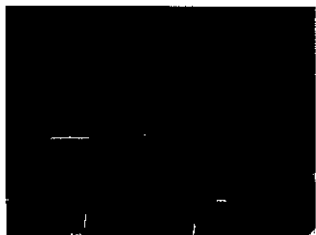


災害ボランティア講演会

～明日の輪島を担う中学生に実施～



◇中学生を持つ親の希望で、全中学校に「災害ボランティア講演会」を実施。



松陵中学校
講師 桑原英文 氏
3年生120名参加



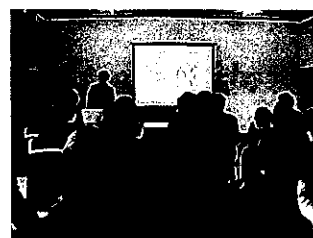
町野中学校
講師 李仁鉄 氏
2・3年生61名参加



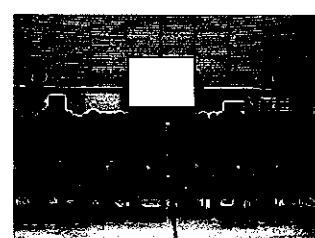
上野台中学校
講師 桑原英文 氏
3年生97名参加



南志見中学校
講師 山下弘彦 氏
1・2年生24名と父兄参加



三井中学校
講師 山下弘彦 氏
全校生徒29名参加



町野中学校
講師 山下弘彦 氏
全校生徒125名参加

伝えよう みんなの声

◇3月25日の日曜日、突然の地震。震度6強を体験しました。

その体験について、あらためてその当時のことを言葉に出して言うという機会がありませんでした。集まる機会があった時、初めて言葉にし、その恐さを共有しました。

この体験こそ、記録に残し、後世に伝えていかなければならないと思い、いくつかの声を拾ってまとめてみました。

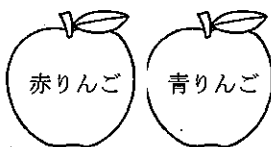
①震災後3ヵ月経った、子育て中のお母さんの声を聞き取りしました。



②震災後半年経った、仮設に住む人に話を聞きました。



③ボランティアフェスティバルにおいて、震災後の困ったことや次に伝えたいことのメッセージを書いて、大きなりんごの木に貼ってもらいました。



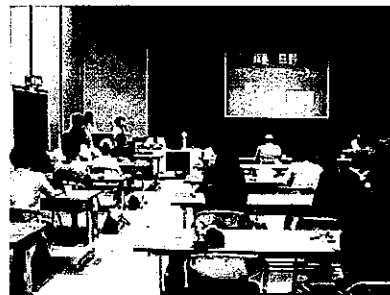
④震源地に近かった門前中学生の声は生々しいものがあります。中学生の声もまとめてみました。



⑤障がい者と家族の人の声を聞いてみました。

⑦輪島市災害ボランティアの会に関わって行動してきた人達の思いもまとめてみました。

⑥輪島・日野ボランティア交流フォーラム参加者の声をまとめてみました。



輪島市災害ボランティアの会 活動報告

輪島市災害ボランティアの会 発足までの経緯

- 3月25日 午前9時41分頃 地震発生 震度6強
- 3月30日 輪島地区(旧輪島市)
輪島市災害ボランティアセンター 開所
場所 輪島市文化会館2階
地元のボランティアの人が必要
↳ 輪島市ボランティア連絡会に要請

災害時 輪島市ボランティア連絡会の人 ボランティアセンターで手伝う



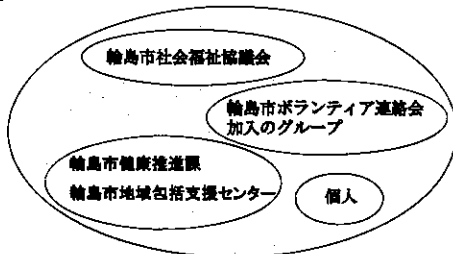
登録している23の団体の人が、毎日4~5人づつ
交代で地図のコピーなどの作業を手伝った

「輪島市災害ボランティアの会」発足までの活動 小学校入学式準備の手伝いさくらメッセージなど



平成19年4月7日
避難所になっていた門前東・西小学校に桜の花びらを飾ってきました

「能登半島地震これからの支援を考える会」にて 「輪島市災害ボランティアの会」発足



「輪島市災害ボランティアの会」 発足後の活動

1. 仮設住宅での活動
2. 災害ボランティア講演会
3. 伝えようみんなの声

仮設住宅での活動

ふれあい喫茶・ふれあい食事会



災害ボランティア講演会

市内全中学校(6校)で講演会実施



伝えようみんなの声

様々な場面で集めた
市民の声を
冊子

「伝えよう能登半島
地震」にまとめる



被災体験を他の地域の
人々に伝える

活動の特長

- ボランティア連絡会の存在
- 被災地の地元住民のボランティア団体
- 市内のボランティアサークルが普段の活動で参加
- 社協や健康推進課などの行政との連携

今後の展望・課題

- 「たすけあいの心」「人と人とのつながり」
- 「地震があったけどよかったね!」と言える輪島に

佐用町社会福祉協議会きらめき復興支援センターの取り組み

社会福祉法人 佐用町社会福祉協議会
地域福祉課 復興支援係 江見義弘

1. 兵庫県佐用町について

2. 兵庫県西北部豪雨災害について

3. 佐用町災害ボランティアセンターからきらめき復興支援センターへ

4. きらめき復興支援センターの取り組みについて

5. 取り組みを通じて・・・

平成21年8月9日 佐用町台風9号豪雨災害からの復興

☆佐用町災害ボランティアセンターから
きらめき復興支援センターへ☆



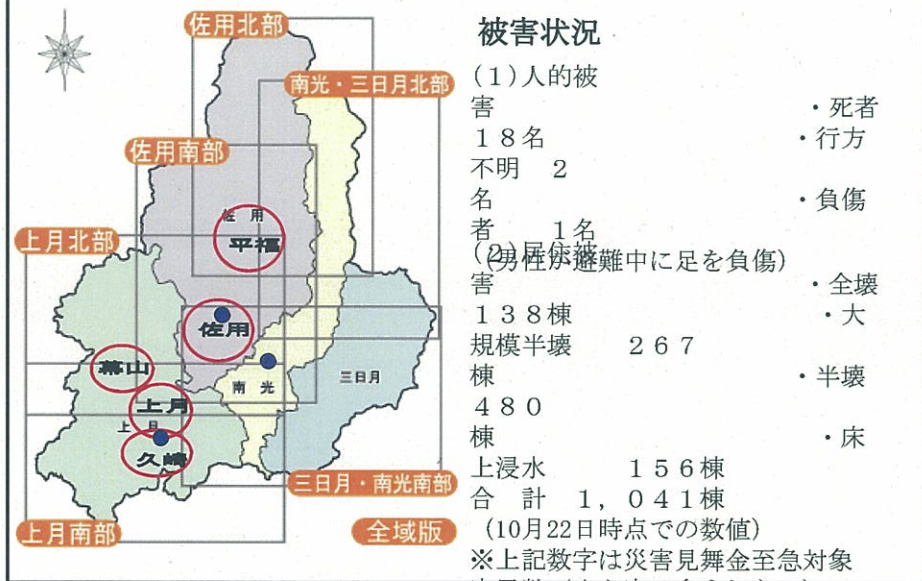
社会福祉法人 佐用町社会福祉協議会

佐用町について



- 人口 20,278人
(H21年9月末)
- 高齢化率 31.76%
- 面積 307.51Km²
- H17年佐用町・上月町・南光町・三日月町が合併し、佐用町へ

佐用町における被害



災害ボランティアセンターから

きらめき復興支援センターへ

☆災害ボランティアセンター

期間：平成21年8月10日～8月31日（22日間）

使命：自力で復旧・復興困難で行政が取り組むことができない部分の支援

復旧・復興の主役は地元住民であり、センターはその地元住民の力を引き出す自立支援を行う 他

機能：被災者のニーズ把握

災害時要援護者の安否確認などによる状況把握

ニーズとボランティアのマッチング・コーディネート 他

日頃からの活動

- ①小地域福祉活動の日常化
- ②地域のキーマン（自治会長、民生委員、福祉委員等）と密な関係作り
- ③地域住民と顔なじみになるくらい地域に出ること
- ④社協支部間や業種間での連携を深める
- ⑤行政と連携を取り、情報の共有をすること
- ⑥日頃から近隣社協などとのネットワーク（横の連携）が大事
- ⑦顔見知りをたくさんしておく
- ⑧継続して災害研修などに参加すること

☆きらめき復興支援センター

期 間：平成21年9月1日～

基本方針：地域住民相互の助け合い、支えあい活動を基に、被災高齢者等の要支援者を中心とした復興支援・生活支援を行い、佐用町における福祉コミュニティの推進を図る

活動内容：①生活復旧・生活の場の環境改善
②生活支援ニーズの把握・見守り
③介護サービス、保健・福祉・医療との連携
④生活復興生活支援活動
⑤福祉コミュニティづくり支援

業務内容：①生活支援相談
②復興支援コーディネート

他

復興支援とは・・・

- ①安心して暮らせるまちづくりを原点に
- ②被災地だけではなく、すべての地域で進めていく
- ③大きなイベント等は行政に任せて、小地域活動を！
- ④サロン（喫茶等）も被災地だけではなく、被災していない集落にも出向き、災害について写真等のスライドを使い振り返りをみんなでする

きらめき復興支援センター活動内容

月 日	事業名
9月 1日～	各集落訪問調査
9月13日	復興支援喫茶
9月26日	無料食器配布
10月 4日～	足湯隊
10月11日	きらめき復興支援バザー
10月17日	復興支援コンサートの会場係
11月 7日	魚沼産コシヒカリの配布
11月11日～	ふれあい喫茶・バザー
毎週水曜日	相談コーナー開設

月 日	事業名
11月14日	仮設チューリップのプランター配布
11月17日	子育てひろば支援
11月22日	がんばろう佐用でバザー
11月23日	復興支援コンサートでバザー
11月24日 ～27日	無料食器配布
11月28日	モーニング喫茶『きらめき』開催 (雇用促進住宅)
11月29日	復興フェスティバル
12月 5日	モーニング喫茶『きらめき』開催 (上月仮設住宅)

月 日	事業名
12月12日	モーニング喫茶『きらめき』開催 (上月仮設住宅)
12月20日	久崎市でわた菓子等の販売
12月27日	お正月杵つきもち配布の餅つき
12月28日	お正月杵つきもち配布
	ふれあい喫茶備品購入補助

月 日	事業名
平成22年 1月～	モーニング喫茶『きらめき』開催 (各仮設で毎月1回開催予定)